

きぼうのいえニュースレター

桜の便りももうすぐそこまで来ています。皆様いかがお過ごしでいらっしゃいますか。いつもきぼうのいえをお支え下さり、温かく見守って下さいましてありがとうございます。ニュースレター第2号ができました。今号はきぼうのいえでの看取りの風景を中心に、スタッフからの投稿を多く載せてみました。入居者さんがどんな毎日を送っていらっしゃるか、少しでも皆様にお伝えできれば幸いです。

忘れられない言葉

遠藤紀子

ソーシャルワーカー（生活相談員）

「こんな状態で行けるわけないだろう。もうその話はしないでくれ。」
死を前にした人を見ると、私はいつも焦りのようなものを感じてしまいます。残された時間、行きたいところはないの？会いたい人はいないの？やり残したことはないの？元気な頃、故郷に戻りたいと話してくれたAさん。満開の桜を窓の外に見ながら、予後6ヶ月という無情な医師の言葉を共に聞いた日から、私はその希望を何とかかなえられないかと思い、何度か問いかけました。その時Aさんは、私にこう答えたのです。Aさんの硬い表情と言葉を聞いた時、私は何て、残酷なことをAさんに言ってしまったのだろうと思いました。人は自分の人生が十分に残されていると思うから、何かをしたいと思うのかもしれない、身体もつらく、



底知れない死への不安と闘いながら、何もしたくなくなるのは当たり前のことかもしれない、と。死を前にした人に必要なのは、これから何をしたいか、ではなく、今までの人生がどれほど価値のあるものだったか、過去を大切にするような関わりなのかもしれない……。1ヵ月後、病院の個室で一人、息を引き取ったAさんの遺骨は家族に抱かれ、故郷に帰って行きました。

「一人で手術室に入るのは淋しかったよ。誰か手でも握ってくれていれば違ったかもね。」

山谷で40年、日雇い労働者として生きてきたBさん。口が重く、愛想のいい言葉を滑らかに話せる人ではありませんでした。そのため、多少の誤解を受けてしまうこともありました。数年前、一人で癌の手術を受けたときのことを話してくれたBさんの声は、いつもより少し湿っていました。私はこのとき、初めてBさんの心の琴線に触れたような思いがして、思わずこう答えました。「今度そういう時があったら、私が必ずそばにいるからね。」私の言葉にBさんは、答えず、その目はテレビから離れることはありませんでした。

「ここでいいよ。目をつぶるまでここにいます。」

家賃10万円のマンションから移ってこられたCさんは、きぼうのいえの部屋を「こんな山谷のど真ん中なのに、狭くて高い。」と、あまり気にいらなかったようでした。病状が進み、治療の方法が無くなっていく中、Cさんは「抗がん剤もくれない。何もしてくれない。死ぬのを待っているだけのようだ。」と繰り返し訴えられました。私はCさんを都立病院のセカンドオペニオンにお連れし、病状の説明を時間をかけて聞きました。Cさんは「初めて病気がわかった」と穏やかな声で話されました。その後、入院治療についても検討されましたが、Cさん自身が、きぼうのいえで最期まで過ごすことを希望されました。家族や仕事仲間も頻繁にお見舞いに訪れる中、Cさんはその言葉通り、きぼうのいえの一室で静かに目を閉じられました。

山谷に通うようになり、2年がたちました。入居者お一人お一人に支えられ、助けられ、励まされ、ソーシャルワーカーとしての働きを続けています。忘れられない言葉、忘れられない場面、そして忘れられない人たち。一つ一つに感謝して、これからも誠実に入居者に関わり続けていきたいと思っています。

厨房から

高橋誠典

厨房スタッフ

きぼうのいえの食事は、朝・昼・夜と、栄養士さんがカロリー計算をして、なるべく利用者さんひとりひとりのニーズに答えられるような食事を提供しております。たとえば肉や魚が食べられない方には、毎日



いろいろな食材を組み合わせで別メニューを提供し、ときには利用者さんの気ままな気持ちや体調の変化など、より細かな対応が出来るように日々努力をしております。

私たちは常に「どうすれば利用者さんが食事を通じて、楽しい気持ちを持っていただけるのだろうか？」と日々思い、仕事をしております。

私たちにできることとは何かを、利用者さんひとりひとりの顔を思い浮かべて調理をしております。

そのためかわかりませんが、書店で料理の本を手に取り、レシピを見て、きぼうのいえの食事に取り入れられそうな料理を見つけたとき、思わず心の中で「ガッツポーズ」をしてしまうこともあります。

料理はもちろんあたたかく、おいしいものを提供しておりますが、利用者さんが食堂にこられたときも、楽しく食事をしていただくために、常に気を配り、その方の嗜好や食事の仕方などを見て、その方に適した食事とは何かを考え、工夫しております。

食事を終えられ、利用者さんがお部屋に帰られる後ろ姿を見送るときに、安心と「もっとこの方に出来ることがあるはず」という思いがあります。その気持ちがあるからこそ「明日こそ」という気持ちが生まれるのだと思います。

こうして私たちは、毎日きぼうのいえで、希望を頂いて毎日精進しております。

特集

きぼうのいえの看取りの風景

山本雅基

きぼうのいえ 施設長

今回で2回目になる後援会だよりですが、きぼうのいえではどんな看取りがされているのかを皆さんにご紹介したいと思います。

ひとつは、きぼうのいえのスタッフ、中川竜さん(女性)の場合。もうひとつは、ここに訪問看護に来てくれている訪問看護ステーション「コスモス」の訪問看護師さん、阿部直美さんの場合です。いずれも普通の病院でも、また一般のPCU(緩和ケア病棟)でも考えられないスタッフと入居者さんとの個人的(パーソナル)かつ濃密な人間関係を育み、築きながら、死のときには、それぞれの腕の中で去っていくという共通のものを持っています。

どうか、きぼうのいえのような看取りをお読みいただき、自分のごく親しい人をどのように見送りたいか、また、自分はどうのように死んでいきたいかを、みなさん各々が思いをいたすよすがとしていただければ幸いです。



Eさんの贈りもの

中川 竜

きぼうのいえ スタッフ

私がきぼうのいえのスタッフに仲間入りしたのは昨年の5月。それまでは都心の大病院で、5年ほどナースとして勤務していた。人を看取る仕事をしなくて、回り道をして取った資格だったが、ここへ来てすぐに「資格」はそれほど重要ではないと感じるようになった。病棟勤務では、100人を優に超える人々を見送った。にもかかわらず、自分が人を看取る仕事をしていると実感したことはあまりなかった。死にゆく人が看取る人に求めているのは、その人とただ共に存在することである。病棟ナースにはそれが許されないことがほとんどだ。きぼうのいえは、病院とは全く異なる家庭的な場所である。私はこの恵まれた場所のある出会いを通して、ただ存在することの幸せを体験した。

Eさんは56歳の男性で、8月の下旬、白くてカッコいいマウンテンバイクとともに入居してきた。病名は末期の喉頭がん。余命は1ヶ月とといわれていて、本人もそのことをよくわかっていた。飄々とした性格で、診療所へ行くと見せかけては自慢の自転車で上野へ遊びに行ってしまうほど活動的だった。私はEさんの声を知らない。のどの手術で声帯を取ってしまったので、コミュニケーションは身振り手振りと口の動



きでとっていた。筆談はどうやら苦手らしかったが、必要にせまられていろいろ書いてもくれた。本人は“俺の声は裕次郎”と声なき声でいうので、まあそういうことにしておいてあげましょう、と答えておいた。

Eさんは、普通の男性よりも体に開いている穴が3つ多い。ひとつはがんが再発して開いたアゴの穴で、ガーゼがあたっている。もうひとつは手術で首に開けた気管孔で、この穴で呼吸している。3つ目は胃ろうといって、おなかからチューブで栄養をいれるための穴。口から飲み込んだものは、胃に到達する前にアゴの穴から出てしまうので造設したものである。入所当時は自分で胃ろうから日本酒を2升一気に注入したりしていた。ただ者ではない。

Eさんの3つの穴のお世話をする必要もあって、私がお部屋に行く機会は多かった。初めの頃は処置のついでに少し遊んでいたのが、だんだん逆転して、遊びに行つたついでに処置をするようになっていった。私達は不思議と気が合って、いっしょに自転車などでかけることもあった。形見として“自転車は竜にあげる”と、合鍵をくれたので、ときどきEさんの愛車に私が乗るこ

ともあった。このころには、アルコールはすっかりやめていて、180ccのちっぽけなバック酒を“お守り”と称して飾っていた。このお守りは結局Eさんが亡くなるまで手付かずだった。体が受け付けなくなったこともあるのだろうが、お酒に酔って得られる幸せ以上のものを、酔っ払わなくても手に入れられるようになったのかもしれない。

10月が終わる頃になっても、Eさんはあいかかわらず上野へ出かけていく生活を続けていた。それでも自転車は、借りるたびにギアが軽くなっていて、体がつらくなってきているのだなと思った。アゴの痛みもできていた。そんなある日、突然ノートに“俺の田舎 竜と行く”と書いた。Eさんの実家は能登の七尾で、いまでも兄弟姉妹が暮らしている。Eさんは生まれ故郷で死ぬことを望んでいたのだが、医療体制が整っていない地域のため、帰るのを断念した経緯があった。それにしても、ふたりで能登？突拍子もない話のように思えたが、やってできないこともなさそうだった。軍資金はあった。実は、初めてEさんに連れて行ってもらったパチンコが絵に描いたようなビギナーズラックで、能登まで行って戻ると



に十分なお金が手元にあった。（しかもそのパチンコの元手もスクラッチくじで当たったあぶく銭だった）もしかしてもしかすると、本当に行けるかもしれない。実現するとしたら、資金以外に、移動中の痰の吸引やガーゼ交換、空港への交通手段など、クリアしなければならぬハードルは多い。さっそく山本さんと美恵さんに相談した。すると、山本夫妻をはじめ、スタッフ、訪問ナース、診療所の医師、私の夫までが応援団になってくれて、それらのハードルを一足飛びに飛び越える勢いで準備が整ってしまった。まるで旧約聖書のモーゼの物語である。海が割れて道ができたような奇跡を感じずにはいられなかった。山本さんは「大いなる力が後押ししているね」と言ってくれた。

11月7日、能登への一泊旅行が実現した。能登空港に兄弟姉妹がそろって迎えにきてくれた。話の流れから、このとき初めて（私ばかりでなくEさんも！）今日がEさんの母上の命日だと知った。お母さんに導かれた旅だったのね。納得、納得という感じである。車にぎっしりとつまったかたちで実家へ向かったのだが、休憩すると雨あられ、走ると晴れ出すという天気だった。

実家についてその夜は宴会だった。長兄のNさんが「今日はめでたい。とにかく飲め。」と音頭をとる。Eさんは飲まないで、私がかわりとにかく飲んだ。甥や姪がぞくぞくとやって来て、25年ぶりにおじさんと再会した。夜中、嵐の音を聞きながら、ここまで順調にきたので、さすがに天気までは期待すまいと思っていた。ところが明けてみると晴天で、この季節の能登とは思えないほどの陽気だった。ぽかぽか照る日差しの中、観音崎に連れて行ってもらった。Eさんが子供の頃遊んだという海はとても穏やかだった。右手に富山湾、左手に七尾湾が一望できる。天の祝福を受けて、当のEさんはウミウシをつついて遊んでいるのだった。その後、お墓参りもすませた。Eさんは、お墓の前でなにを思ったのだろう。そういえば私は初め、Eさんと稼いだパチンコのお金をEさんのお墓参りに使おうと思っていたのだ。生きているEさんといっしょにお墓参りをする事になるうとは！やっぱり母上が呼んでくれたのだろう。お母さん、ありがとう！心の中でなんども叫んだ。私達は、大量のおみやげをもたせてもらって、能登を後にした。飛行機の中から、E

さんの家の人たちがデッキにまで出て見送ってくれるのが見えた。なつかしい人たちや海とお別れするというのに、Eさんはとても幸せそうだった。故郷の海からパワーをもらってきたに違いなかった。

能登への里帰りが大成功を収めたあとも、Eさんは以前の通り飄々と暮らしていたのだが、クリスマスが過ぎるころ容態が急変した。アゴの穴から出血が続き、気管孔には酸素マスク、胃ろうからは薬しか注入できなくなって、今夜が山かと思われる日々が続いた。亡くなる前夜、Eさんの大好きな裕次郎のCDをかけていると、まるでゾンビのように何度も立ち上がろうとするのだった。「Eさん、ダンスでもする？」とあって、私達はしばしチークダンスとおぼしきダンスを踊った。翌日、快晴のなか、Eさんは旅立った。午前中、ほとんど意識がなかったのだが、午後になって、急に酸素マスクを放り出して“起き上がりたい”と合図した。ベッドサイドに座らせてこれでいいのか問うと満足そうにうなずいた。Eさんを支えながらそっと酸素マスクをあてようとする、やはり払いのけてしまう。驚くほど意志がはっきりしていた。私はEさんの体を支えてただそばにいただけだった。ふと、よく携帯電話で写真を撮っては能登の家族へ送ったことを思い出した。「Eさん、ツーショットでも撮ろうか」と言うと、とてもやわらかい表情を見せてくれた。これがふたりで撮る最後の写真になるだろうと思いながら、携帯に手をのぼした。いざ撮ろうとしてふと見ると、Eさんは私の腕にもたれたまま息を引き取っていた。あしたのジョーの最期みたいに、座ったままの姿勢で亡くなったのだった。思わず抱きしめて「Eさん、かっこいい！」と言ってし

まった。穏やかな顔をして、眠っているようだった。知らせを聞いてかけつけた美恵さんが、ふたりの写真を撮ってくれた。そのまま能登の実家にも連絡した。バックには裕次郎の「粹な別れ」が流れていて、Eさんらしい最期だと感じた。

Eさんとの約束どおり、例のマウンテンバイクは今は私が乗っている。しかし、Eさんが遺してくれたものは自転車だけではなかった。私はEさんと過ごした日々を通して、人にはどんな深刻な現実を目の前にしても、大きな祝福を感じる力があることを学んだ。それと、すべてをただ起こるがままにまかせて、それを楽しめばいいということも。これはまさに生きることそのものではないだろうか。

Eさんが死んでも、初めのころ恐れていた喪失感はなかった。かえってたいへんな贈り物もらったような、不思議な感覚だけがある。スーフィー教徒の格言に、「失ったものを嘆いて心情が涙を流すとき、魂は見出したものを喜んで声を上げて笑う」というのがあるが、私の中で、まさにその通りのことが起きている。こんな幸せなお看取りを許してくれたきぼうのいえと、祈り、支えてくれたスタッフのみなさんに心から感謝している。



一人きりの在宅を看取る

阿部直美

訪問看護ステーション「コスモス」看護師

自分の家でその人らしく家族に見守られて安らかに旅立つというのが在宅での象徴的な看取りの姿です。しかし、ここ山谷では、故郷や家族とのつながりを失った単身の利用者さんが多く、自分の家もなく家族もいない方を私たちは在宅で看取ります。一人で生き、一人で死にゆこうとする方を看取るとき、そこで求められる看護とは何だろう？自問し続けながら関わった、ある一人の患者さんがいました。

1、心を許さないHさん

Hさんは60歳代の男性。直腸がんと告知され、人工肛門の造設手術を受けた後、きぼうのいえで療養生活を送るようになりました。Hさんは日雇い労働に従事しながら山谷で暮らしていましたが、バブル崩壊後は仕事が減り、ドヤに泊まるお金もなくなって、発病当時は隅田川べりにテントを張って生活していたそうです。

Hさんは自律性が高く、意志のしっかりした男気のある方でした。人当たりは悪くないのですが、きぼうのいえやコスモスのような山谷で活動する組織に対して、金儲けをもくろんでいるのではないかと不信感を抱き、心を許そうとはしませんでした。Hさんが発熱した際、臨時で看護師が訪問すると、「稼ぎたいから来たんだな」と彼は言いました。Hさんの症状緩和を図るため、往診医を紹介すれば、往診医とコスモスが提携して稼いでいると疑いました。私たちの行動には利得が絡んでいると警戒し



て、何度説明しても気持ちは一向に伝わりませんでした。

数ヶ月後、がんが再発。Hさんは一人で入院を決めて、きぼうのいえを立ち去りました。

3ヶ月間入院し手術を受けたものの、治療は奏功せず、末期と診断されて2004年10月に退院となりました。そして退院後は、きぼうのいえに戻るのではなく、ドヤに住みたいというHさんの希望で、三畳一間のドヤでの生活が始まったのです。

2、ドヤでの闘病生活

同居する家族のいないHさんにとって、在宅とは一人での生活を指しました。自分のことは自分で決めて一人で自由に歩いてゆく。それがHさんのこれまでの生き方であり、また望む生き方でもありました。「今年いっぱいはこちらで頑張る。動けなくなったら入院する」とHさんは断言し、きぼうのいえにいた頃と比べ随分体力が落ちていたにもかかわらず、できる限り身の回りのことは頑張っただけで自分で行っていました。

Hさんの旧肛門部にはびらんがあり、左腹部には人工肛門が、右腹部にはがんの壊死組織から出る浸出液を排出するろう孔が形成されていました。それらに対する処置や清拭、入浴などのケアを行うため、私はほぼ毎日訪問しました。訪問すれば、表面



上Hさんは愛想よく対応してくれますが、依然、凍り固まった彼の心が溶ける気配はありませんでした。今度は親切なドヤの女将さんに対しても「実はくせ者だ」と不審な目を向け、「俺は最初から疑ってかかるからな。自分以外信用しない。誰も信じない」とHさんは冷ややかに言い放ったのでした。私はなすすべもなく、毎日のようにHさんのもとに通いながら自問自答を繰り返していました。

「身も心もたった一人で死んでゆくのだろうか？何を望んでいるのだろうか？でも望むことすべてが本当に求めていることではなくて、彼も気づいていない彼に必要なことがあるのではないか。Hさんの心の平安は一体どこにあるのだろうか？」

とにかく今はHさんが決めた“今年いっぱいドヤで頑張る”ことを支えられるように私も頑張ろう。安心して信じてくれる日が来るかどうかわからないけれど、あきらめなくて、最後まで投げ出さないで、心を込めてHさんのそばにしよう。先は見えないまま、いつもそんな答えに帰着しました。

そうして訪問を重ねるうち、私はHさんから昔の頃の話などを聞き、楽しかった若き日のこと、親兄弟に迷惑をかけたこと、後悔や無念な気持ち……言葉の端々からこぼれる彼の思いをうかがい知るようになりました。

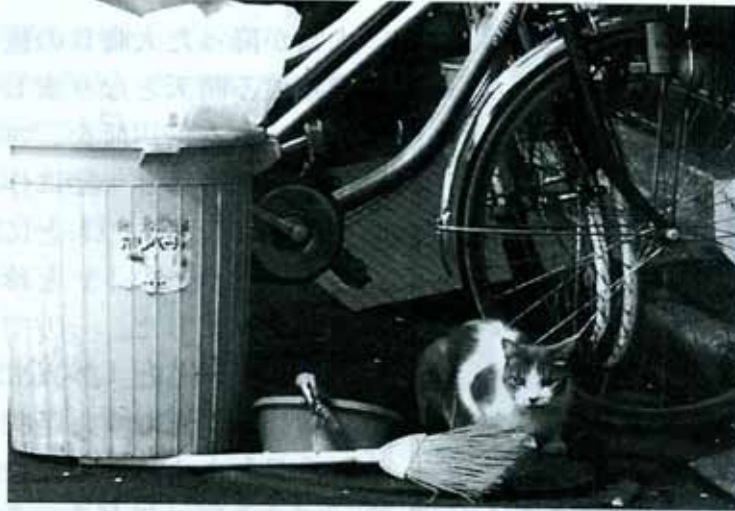
病気が徐々に進行していた12月のある日曜日、Hさんは酒を飲みに行くと言い出しました。私は息を切らしながらも人の手は借りずに歩く彼の背を追いました。店に着くと、Hさんは自分の状態を悟ったように、険しい顔つきでカッと私の目を見てこう言いました。

「最後の酒になるかもしれないから、好きなもの頼めばいいじゃん。……急に悪くなってきた。悪くなってきたと思うだろ？来年はホスピスか……」

串焼き、刺身、鍋、そしてチューハイ、次々と皿をあけてゆき、Hさんは淡々と話しました。「これがなれの果てだ」「友達もいるけど、山谷の連中は金のないやつのところには来ない。今の俺には利用価値がない」迫りくる病魔に追われながら、日が暮れてゆく道を、Hさんはたった一人、歯を食いしばって歩いているように見えました。

Hさんと別れた後、私は無性に悲しくて苦しくて、泣きじゃくりながら思いました。一人で生き、一人で死にゆこうとするHさんに本当に必要なものは、利害関係を超えて彼を思う心ではないか。Hさんの最期するとき、信頼し合える関係がなければ彼の心の平安はないのではないか。

がんの進行による神経障害で足の動きが悪くなり、全身のだるさも増して、日を追うごとに、今までHさん自身でできていたことが、一つひとつ困難になってゆきました。Hさんは介護保険の対象外で、彼の生



活を支援する手は訪問看護のみでしたので、Hさんが病状の悪化とともにセルフケアができなくなってくると、1日に2回、3回と休みなく訪問しなければならなくなりました。独歩が難しい状態になっても、Hさんは往診を受け入れなかったため、私は病院への付き添いから、買い物、洗濯に至るまで生活全般を援助するようになり、それは看護の域を越えていました。Hさんのケアに比重がかかることで、コスモスの皆にも迷惑をかけ、これでよいのか、私の援助は間違っているのではないかと悩みました。それでもやはりHさんのそばにいて彼の望む生活を支えたいと、私自身も周りのスタッフに支えられながら訪問を続けました。

食事を準備し、排泄物を処理し、身体を拭き、冷えた足を温め、「歩きたい」という彼の強い希望にそってリハビリを行い…そんな日々の中で、身体をつらさと、何より自由が利かず人の世話になりながら生活せざるを得ないという苦痛が、余計にHさんの気を荒立たせたのだと思いますが、少しでも彼の意にそぐわない行動をとると、Hさんはすぐ眉間にしわを寄せ、よく怒りました。朝晩の食事の準備は難を有し、Hさんのリクエストに応じて何軒も店を回り、

ようやく買い揃えた食事も「買い物下手だな」「気が利かない」「小学生以下だな」と罵倒されました。そうそう怒られると私も腹が立ってしまい、ときには言い返して喧嘩もしましたが、食事を済ませ、ケアが終わって落ち着くと、Hさんは穏やかになり、そして静かに話し始めました。

「故郷は海のそばで、高校は東京まで通っていた。夏休みには毎日友達と朝から麻雀をやって、昼、海に泳ぎに行き、家には帰らないで食事友達の家で食べて、夜また麻雀。あの頃は一番よかったなあ。あの頃に戻りたいなあ……」
「昭和51年5月6日からこの仕事を始めた。最初は大阪。その日稼いだ金をその時使って暮らしていく。そういう仕事が性に合った」

彼が目を細めて語る人生の一場面を聞くことが私はとても楽しみでした。「みじめな人生だよ」とHさんは自嘲しましたが、私には彼の歩いてきた道がいとおしくてなりませんでした。

病に伏す自分の境遇を「親兄弟を泣かせたしっぺ返しだ」「迷惑をかけた親のたたきだ」と彼は言いました。「俺が死んだら、兄弟に連絡してもらって遺骨を取りに来てもらうよ。だけど引き取りたくないだろう。

隅田川にまいてもらってもいいよ」
 そんなふうに話す彼に対し、私は僭越ながら
 こう言ったことがあります。「お父さんもお
 母さんも恨んでなんていないと思う。許して
 くれてるよ。見守っていてくれるよ。天国
 に行ったらお父さんとお母さんに会えますよ」

「俺は地獄だ。天国には行けない」「絶対天
 国に行けるよ。天国で待っていて下さいね。
 私もいつか行くから。天国に行っても忘れな
 いでね」「忘れないよ。絶対忘れない」

Hさんが何か特別なものを持っているとか、
 どのような状態にあるからとか、どういう理
 由や条件も関係なく、幾ら怒られても、私は
 Hさんが愛しくて、あなたが大切な人だとい
 うことを伝えたい。あなたの代わりになる人
 はいなくて、いなくなったらすごく悲しむ人
 がいて、愛されているのだということをお
 Hさんに感じてもらいたい。それが私の看護の目
 標であり、一番の願いでした。

3. 溶けてゆく心

年末にかけて、Hさんの足の動きはますます
 悪くなり、転倒を繰り返しました。ドヤで
 の生活も限界かと、一時的に入院という対応
 も考えましたが、「正月は病院で過ごしたく
 ない」というHさんの希望のままに、ドヤで
 新年を迎えることにしました。

大雪が降った大晦日の後、2005年元旦の朝
 は澄み渡る晴天となりました。Hさんの要望
 望であった安倍川餅を、コスモスで出勤して
 いた看護師さんと一緒に作り、ホカホカのお
 餅を抱いてHさんのもとに駆けつけました。
 Hさんは「うまい！」と珍しく褒め、4個ペ
 ロロと食べました。一方で、翌日頼まれたみ
 かんを買って戻ると「こんなに(たくさん)!!っ
 とに買物下手だな」と予想どおり怒られ、H
 さんは呆れたように言いました。「もう(出
 会ってから)一年だろ。それでまだ俺のこ
 とがわかんないってさあ……」「だってHさん
 だって言わないでしょ！本当には心を許して
 ないでしょ？」と私が言い返すと、「いや、
 そんなことないよ。昔のこと話してるじゃん。
 俺は他でそういうこと話さないからな。これ
 以上の過去は俺にはない」と彼はほほえみま
 した。

Hさんは念願かなってドヤで年を越し、次
 の目標は3月だと言いました。「頑張らない
 となあ。頑張るか！」とリハビリに意欲を見
 せていましたが、そんなHさんの思いをよそ
 に病気は残酷にも進行し続けました。1月後
 半には、彼はほとんど寝たきりの状態とな
 りました。ドヤでの生活はすでに限界を越えて
 おり、どこで最期を迎えるのかを決めなけれ



浮草に

根をくれし館

天の川

吉川 八重子
 2006 七夕

ばならない時期に差しかかっていた。

お正月が過ぎた頃からか、私は凍り固まっていた彼の心が溶けてきているように感じました。私自身も、飾らず偽りない気持ちでHさんのそばにすることができ、彼に自分の気持ちを素直に表せるようになっていました。

入院という選択も含め、今後のことをHさんと話し合うなかで、私は死ぬまでHさんのそばにいたいと伝えました。するとHさんは「でも、つらいよ？」と答えました。彼の返答に私は驚くと同時に胸が熱くなりました。私たちの目的は、訪問による報酬であって、それがなければ自分のことなど気にならない、自分の顔が見たいわけがないと以前のHさんは言っていました。けれども自分を看取ることが私にとってつらいことだと案じてくれたHさんの言葉は、利害関係を超えて、彼を思う心がHさんにはっきりと届いていたことを教えてくれたのでした。

数日後、Hさんは言いました。「一人だったらふてくされて、こんなに生きられなかったよ。阿部さん、息をひきとるのを見てくれよ」

そして、Hさんは再び在宅での看取りが可能な、きぼうのいえへ戻ることに決めました。

4、きぼうのいえへ

きぼうのいえへ移ってから一週間ほどでHさんの病状は急激に悪化しました。がんの浸潤によりろう孔から多量の出血があり、意識ははっきりしていたものの、いつ何があってもおかしくない状態でした。

「つらいのはだるいのだけ」「だるいなあ。寝てても疲れる」とHさんは全身のだるさを幾度となく訴え、それは死期が近づくに



つれていっそう強くなり、がん終末期に特徴的な身の置き所のない、ときに希死念慮を起こす要因にもなるような苦しい症状でした。布団の重みさえも彼に苦痛を与え、身体の向きをほんの少し変えるのもしんどい状態でしたが、看護師が訪問する以外の時間、Hさんは他者の手を借りることを拒み、できる限り自分で排泄物の処理をして、薬の管理なども自分で行っていました。それでも今まで一人で生きてきて、人に借りを作ることが嫌いで、自分のペースで自由に飛び回っていたかったHさんにとって、この状況はあまりにも耐え難いものでした。

「何から何まで人の世話になって生きて、寝たきりで、何のために生きてるんだ？ 生きている意味がない」とHさんはつぶやきました。

私はHさんの苦しみをどうすることもできませんでした。「自身の最期を悟られているHさんに、死にさえも希望があるのだと伝えること」それはコスモスのOさんが教えてくれた、今のHさんに必要な私の仕事でした。Hさんが安心して死へ向かえるように……。Hさんを前にして、この言葉が私の頭の中を反芻していましたが、私にはできませんでした。Hさんの死期が近いことは理解していましたが、看護師として自分の役割も自覚はしていました。けれど

も、生きていてほしい、ずっとHさんのそばにいたい、という私のどうにも抑えられない思いが、彼の死を認めさせなかったのです。

私はHさんが大好きでした。彼のこういう性格が好きだとか、こういう理由があるから好きだというのではなく、Hさんの人生、Hさんの思い、この世でたった一人しかいないHさんのことを知れば知るほど、彼の心の深みに触れて愛しくなり、彼のそばで一緒に苦しみ悩みながら歩いているうちに、いつしか私にとってHさんは実際かけがえのない大切な大切な存在になっていたのです。私はそんなHさんの死に向き合うことができず、むしろ彼を死とは反対方向へ引っ張っていました。“あなたが大切な人だと伝えたい”それがHさんに必要だと思い、私が望んだことではありましたが、大切な人を失うことに私自身が耐えられなくなっていたのです。そして、このことが多少なりともHさんの重荷になっていたように思います。

「すごく一生懸命やってくれるじゃん。すごく一生懸命だから、自分は応えられなくて良くなれないのがつらいんだよ」とHさんは言いました。勤務が終了しても私はHさんのもとをなかなか去れず、一緒にテレビを見たり、話をしながら、彼のとなりで涙を流すこともありました。瞼を腫らした私を見てHさんは何も言いませんでしたが、明日もお願い、どうか明日も……とすすがるような私の思いを感じ取っていたのだらうと思います。別れ際、いつもHさんは「明日も待ってるから」と力強く声をかけてくれました。そうすると「また明日ね。明日も元気でいてね」と心の底から願う言葉が、どうしても私の口をついて出てしまうので

した。

がんは否応なくHさんの身体を蝕んでゆきました。Hさんの旧肛門部は硬く腫脹して多量の膿が排出され、ろう孔からの出血は日に日に増えていました。そんな状況にあっても、彼は最期まで屈せず食欲旺盛で、きぼうのいえの食事の他に刺身やまぐろのブツなど、ドヤにいた頃と同じように食べたい物をリクエストされ、亡くなる5日前にも、チューハイ1缶とやきとり7本を一気に平らげる姿が見られました。水分もそれなりに摂っていましたが、出血は止まらず循環血液量は減少しており、亡くなる3日前、Hさんの最高血圧は60まで下がり、一時意識を失いました。数時間後に目覚めたとき、Hさんは涙をこらえてこう話しました。「夜中3時頃寒気がして目が見えなくなった。のどが渴いて1リットルくらい水を飲んで、もう死ぬんだと思った。死んじまえばよかった。なんで目が覚めちゃったんだ……」

その日の晩、私は点滴という対処方法があることを彼に話しました。すると「それならやればよかったじゃん。していいよ。したいんだろ？」とHさんは言いました。点滴でHさんの命が延びるのか、延びることが彼にとって良いのか、でも、もし一日でも少しでも彼が生きる可能性があるのなら、やりたいという気持ちが私のどこかにあったのだと思います。それがHさんに伝わり、私はまた自分本位な思いで彼を追い詰めてしまったように感じました。「Hさんの望むようでいいのよ」と私は言い添えましたが、Hさんは「するって言ってんだろ！！」と怒鳴り、結局一晩点滴を施行することにしました。

この夜、私は朝までHさんのもとに留ま



りました。点滴をしながらHさんは「俺が死んだら、阿部さんには旅行に行ってもらいたいんだ。あそこに10万あるから」と話しました。「旅行？どこに？」「温泉に行きたいって言ってただろ？」「覚えていてくれたんだ。ありがとう。……うん、Hさんのこと考えながら行ってくるね」

“死に希望がある” どうしたらそんなふうに見えるのでしょうか。死がもたらす彼の人生の終わりと二度と会えない別れが私には悲しすぎて、あとからあとから涙がポロポロこぼれ落ちとまりませんでした。それでも笑って「天国で見ててね」と私が言うと、Hさんは優しい顔をして「見てるよ」と穏やかに答えました。そして、弔いをきぼうのいえでやってもらうことにしたこと、自分の死後、兄弟に連絡だけはしてほしいことを言い残しました。

5、一緒に待とう

死期が迫っていたその日、気持ちがせいで朝早く訪問すると、Hさんはきぼうのいえの当直の方に付き添われて着替えをしていました。いつもと違う光景に私は一瞬立ちつくしました。ベッドサイドのテーブルに置いていたタバコやティッシュ、彼の不安から手の届くところに何本も並べておいた飲用のペットボトルが、部屋のほうほう

に散らばり、昨晚まで整然としていた室内は驚くほど乱れ、衣類や床が水でびしょびしょに濡れていました。Hさんは上半身だけ後ろへ反り返るようにベッドから転落していたとのことでした。「夜中3時頃落ちて身動きできなくなった」とHさんは言いました。

ちょっと身体を動かすにも相当の苦痛を伴うHさんが？眉間にしわを寄せ死の恐怖と闘いながら、闘の中を何度も何度も必死に手探りしている彼の姿が目につかびました。Hさんは一人どんな思いで長い夜を耐えたことか。私はかける言葉も失い、この朝の惨状が、私の想像など及ばない彼の壮絶な夜の苦闘の跡なのだと理解したのでした。

Hさんは少しいつろな表情で「ここどこ？」と聞きました。「きぼうのいえですよ」と答えると「日本じゃないみたいだった」と。「日本じゃないみたい？どこ？」「インド」そして、Hさんは布団を顔の上にかぶせ、涙を隠して嗚咽しました。「つらい。死んじやいたい」次の瞬間、私は最も恐れていた、一番認めたくなかったことを口にしていました。「もう少しで楽になれるよ。もう少しで楽になるよ」

それはHさんの死が近いことを伝える言

葉でした。これから彼に訪れる死こそが、この耐え難い苦しみからHさんを完全に解放してくれるのだと、Hさんとともに私自身も死に希望を見出し、身も心もゆだねて発せられた言葉でした。

Hさんは「うん」と答えました。私は彼の布団に顔をうずめて泣きました。「もう頑張らなくていいよ。もう充分だから」「うん。背伸びするの……疲れた」「ごめんね。私ももう一生懸命やりすぎないから。天国はとっても気持ちがいいところだって聞いたよ。もう少しだから。それまで一緒に迎えが来るのを待とうよ」Hさんは「待とうか」と涙でかすれた声でそう答えました。

この夜、私はまたHさんの部屋に泊まることにしました。「そのままでいいよ。Hさん、大好きよ」と私は自然に彼を抱きしめました。するとHさんは意外にも「俺も好きだよ。大好き」と返事をしてくれました。それから、Hさんは夕食を少し口にした後、私にも食事を摂るよう勧め、私はベッドの脇できぼうのいえの夕食を頂きました。HさんはいつものHさんらしく、きぼうのいえの食事について冷静にこんな批評をしていました。「結構うまいだろ?」「うん、おいしいね」「米が硬いだろ?」「そうだね、ちょっと硬めだね」「(きぼうのいえの住人は)年寄りが多いのになあ」

2月の冷たい風が吹きつける静かな土曜日の夜でした。Hさんとの別れが近づいてくる悲しさと、それを避けられない無力感や切なさも私の中にももちろんありましたが、不思議なことに、憔悴しきった前日までの心境とは明らかに異なっていました。このときHさんと過ごした時間は嵐が去ったように穏やかで、Hさんも私もすべてをゆだ

ねて荷を下ろしたような、そんな安らぎに包まれていました。

夜が更けて、「今日は泊まっていくの?」とHさんが尋ねました。「うん、泊まる」と私が笑顔で答えると、彼は「助かるよ」と言ってほっとした表情を見せてくれました。「ずっとそばにいるからね。安心して眠ってね」Hさんはほほえんで、まもなく眠りにつきました。一晩中手をつなぎながら、私はゆっくりと呼吸を続けるHさんに全身全霊で寄り添うだけでした。“一緒に待とう”最後に残された私ができる唯一の看護でした。Hさんはそのまま目覚めることなく、やわらかな陽が射し始めた朝、私の腕の中で静かに息をひきとりました。

Hさんが亡くなった後、今でも、あのときこうしていれば、私にもっと知識があれば、Hさんはあれほど苦しまなかったかもしれない、どうしてもっと彼の苦痛を理解できなかったのかと後悔と罪責感でいっぱいになることがあります。亡くなる数日前、Hさんは「生きているのがつらい」「阿部さんが悲しむから死にたいと言えない」ときぼうのいえの美恵さんに言ったそうです。私がHさんを執拗に頑張らせ、追い詰めてしまったことも事実であり、私にはこれから学んでいかなければならない課題がたくさんあります。

“あなたが大切な人だと伝えたい”そう願って関わり、当初、頑ななHさんの態度に「こんなに通じないことってあるのだろうか」と落胆したときもありましたが、それすら傲慢だったのかもしれませんが、それぞれに到底知り得ない様々な苦しみ、悲しみ



を担って長い道のりを辿ってきた一人の人間を、果たしてどのくらいの重さで、小さな私が真に大切に思い、どう伝えることができるのか？それは当然のことながら、単なる言葉では伝わらず、たった一人で彼が背負う苦しみや痛み、あるいは喜びを共有したいと真剣に向き合い、差し出す手に心を寄せて一緒に歩み続けるなかで、いつの日か通じ合うときがくるのだと思います。知識も技術も経験も充分ではなく、「おっちょこちょいで、あわてんぼうで、一生懸命がとりえだ」とHさんが評する力不足の私の看護が決して正しかったとは言えませんが、それでも、Hさんはかけがえのない大切な人だということを感じ、最期まで彼らしく自分の生き様を自分で決めて安らかに天国へ旅立ったのだと私には思えるのです。自分自身が大切な尊い存在なのだと感じられたとき、それが、逃れることのできない苦しみの前でさえ、自分の生に誇りを持って“生きよう”と答えてゆく力になるのではないのでしょうか。

心を込めた一つひとつの関わりが、人間対人間の絆を少しずつ少しずつ紡いでゆき

ます。それは一見たった一本の糸に見えても、実は様々な人の心が幾重にもよりあって、一つの確かな絆になるのだと思います。Hさんの人生の最期、退院してから4ヶ月の道程を振り返ると、Hさんと私の絆もまた、たくさんの人の心が触れ合い、いろいろな形で支え合う中で育まれていたことを実感します。

いつもHさんを気にかけて世話をしてくれたドヤの女将さん。敵意を抱いて一度は自ら出て行ったHさんを、快く迎え入れてくれたきぼうのいえの方々。美恵さんとボランティアの方がHさんの気持ちを楽にしてくれました。スタッフの皆さんに優しくされ、Hさんは「親切にされて、ほろっときちゃったよ」と涙して感謝していました。スタッフの皆さんは私のことまで心配してくれて、いつでも休めるようにと礼拝堂に寝床をしつらえ、温かい食事まで出してくれました。そこに込められた優しい心遣いに私は元気を頂き、最期まで彼のそばにいたことができたのだと思います。また、施設長の山本さん夫妻と僧侶の義浩さん、コスモス所長の山下さんのおかげで、私は夜もHさんのもとに留まることができ、彼の苦闘を少しだけでも分かち合うことができました。私の思いを尊重し未熟な看護を温

かく見守っていてくれたたくさんの人たちに支えられ、助けられて、私はHさんを見送ることができたのだと思います。暖かな息吹のそよぐ山谷のまち。一人ひとりの思いを、存在を、大切にしてくれるコスモス。ここで働けるしあわせをしみじみ感じつつ……Hさんから頂いた素晴らしい贈り物を胸に、今日も感謝しながら山谷のまちを走ります。

会計報告

平成18年1月～12月に、後援会にお寄せいただきました会費・寄付は以下の通りです。皆様の温かいご支援を全額きぼうのいえの運営資金にあてさせていただきました。なお、前号にて、今後ご寄付者一覧をニューズレターに載せる旨お知らせしましたが、ご寄付者全員に匿名の場合の意思確認が困難なため、ご寄付者一覧を載せることを見合わせていただきました。どうぞご了承くださいませ。

また、前号で皆様にご支援をお願いしました、「きぼうのいえ建築募金」は、平成19年2月末現在、177件、合計4,936,052円お寄せいただいております。開設時の借入金返済へ充てさせていただきます。

このほかにも、山谷・すみだリバーサイド支援機構本体へのご寄付・物品のご寄付など、いろいろな形で皆様のお支えをいただいておりますことを、この場を借りて御礼申し上げます。

「きぼうのいえ」は、福祉施設の認定が得られないため、行政からの補助金を一切

受けず、入居者さんからの家賃・光熱費によって運営しております。そのため、年間の赤字約1,000万円を皆様からのご寄付によってまかなっている状況です。どうぞ今後とも私たちの活動にご理解いただき、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。今回、ニューズレターと共に、新しく出来ました後援会のパンフレットを同封しました。ご友人などにご紹介いただける場合はこちらからご希望枚数お送りしますのでご

科目	件数	金額
個人会員	227件	¥1,675,000
法人会員	11件	¥340,000
月約会員	100件(32名)	¥501,000
寄付金	254件	¥7,565,937
合計	592件	¥10,081,937

連絡ください。また、年度が代わりますので郵便振替用紙も同封しました。既にご入金いただいている方はどうぞご容赦ください。

編集後記

今回の第2号では、きぼうのいえの看取りを始めとした、毎日のようすを出来るだけリアルに読み取っていただきたいと思い企画しました。スタッフや訪問看護師さんの生き生きとした入居者さんとのかかわりかたや働き、看取りにいたる心のひだまで描けているように思います。

読者の皆さまからの読後感などもお寄せいただければ幸いです。

これからも、きぼうのいえの日々をお伝えできる機関誌にしていきたいと思っております。乞うご期待。 文責 山本